

付 論 4

朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室

亀 田 修 一

1

竪穴系横口式石室は、一見、竪穴式石室の形をしながら、一方の短壁より屍体等の搬入を行い、すべて完了後、そこを外部から閉塞した石室である。^(註1)この形の石室は、朝鮮半島において、伽耶地域を中心に新羅、百済両地域でも確認されている。伽耶地域の石室を総括して検討された全吉姫氏は、^(註2)竪穴系横口式石室は伽耶地域にあった竪穴式石室に百済の横穴式石室の影響が^(註3)加わり、発生したものとしている。

三国時代の墓制としては、竪穴式石室、横穴式石室、積石木槨などが主として扱われてきた。しかし、最近の調査によって、竪穴系横口式石室が単に伽耶地域の墓制としてのみ扱われることが不充分であることが明らかにされつつある。

そこで、小稿では朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室を検討することによって、朝鮮の墓制を考える上での、更に、日本の竪穴系横口式石室研究の一助となることを期すものである。

2

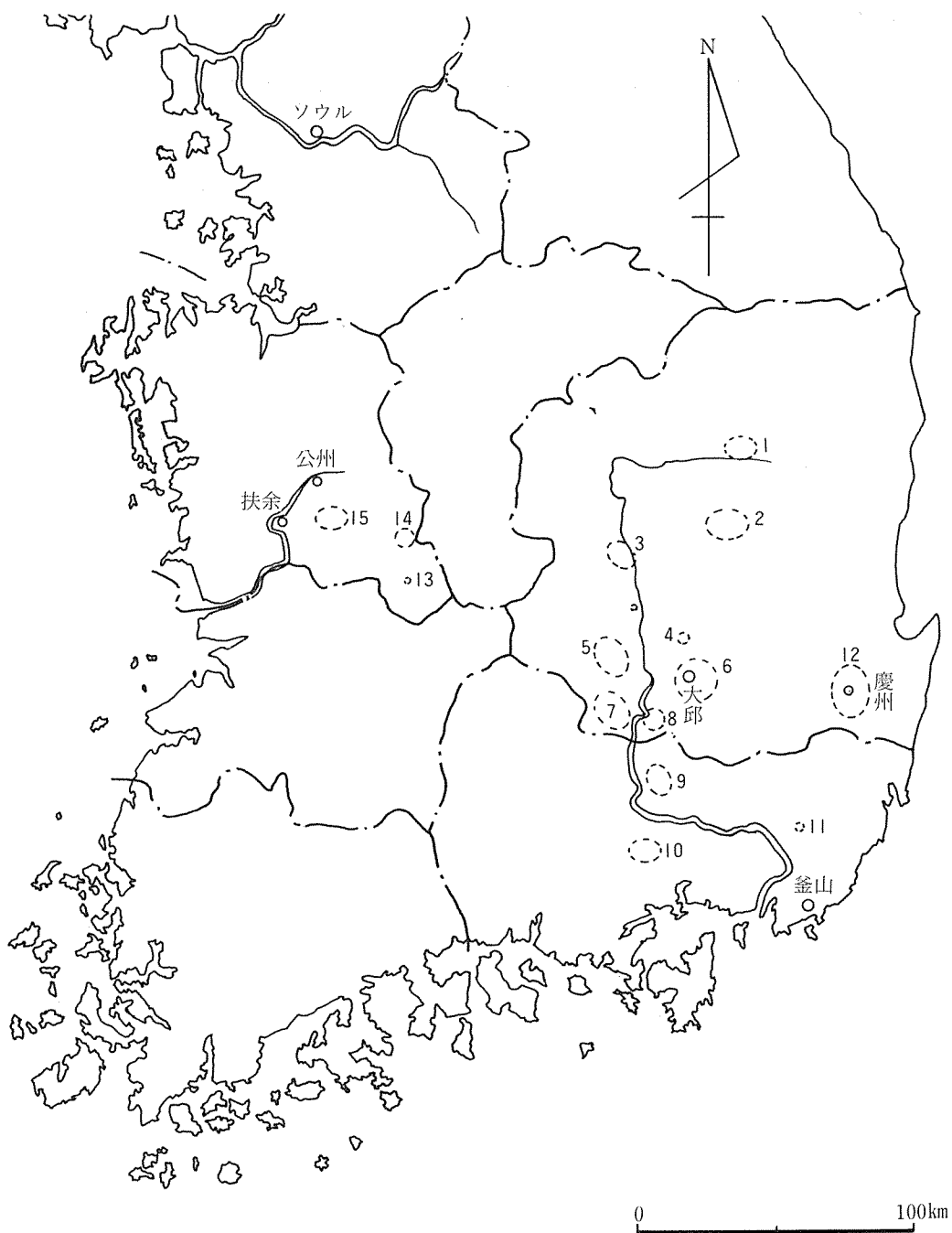
竪穴系横口式石室は、伽耶、新羅、百済の各地域で確認されているが、以下、地域ごとに見てみよう（第1図、付表）。^(註4)

1. 安東地域では、造塔洞古墳、中佳邱洞古墳が確認されている。^(註5)造塔洞古墳は長径21mの円墳で、東、西二石室がある。ともに方形塊石を使用して四壁を構築し、両長壁は上部でやや内傾している。東石室は長さ7.20m、幅1.70～1.84m、西石室は長さ6.22m、幅1.90～2.36mを測り、屍床がそれぞれ奥壁に平行して6個、5個あり、追葬されていることがその屍床の状況からわかる。^(註6)

中佳邱洞古墳は直径21mの円墳で、主室と副葬品室がある。主室は長さ5.0m、幅2.0mの大きさで、自然石と割石を混用して四壁を構築している。両長壁は上部で内傾する。屍床は長軸にそって品字形に3基つくられているが、屍体は5体ある。追葬がなされている（第2図）。

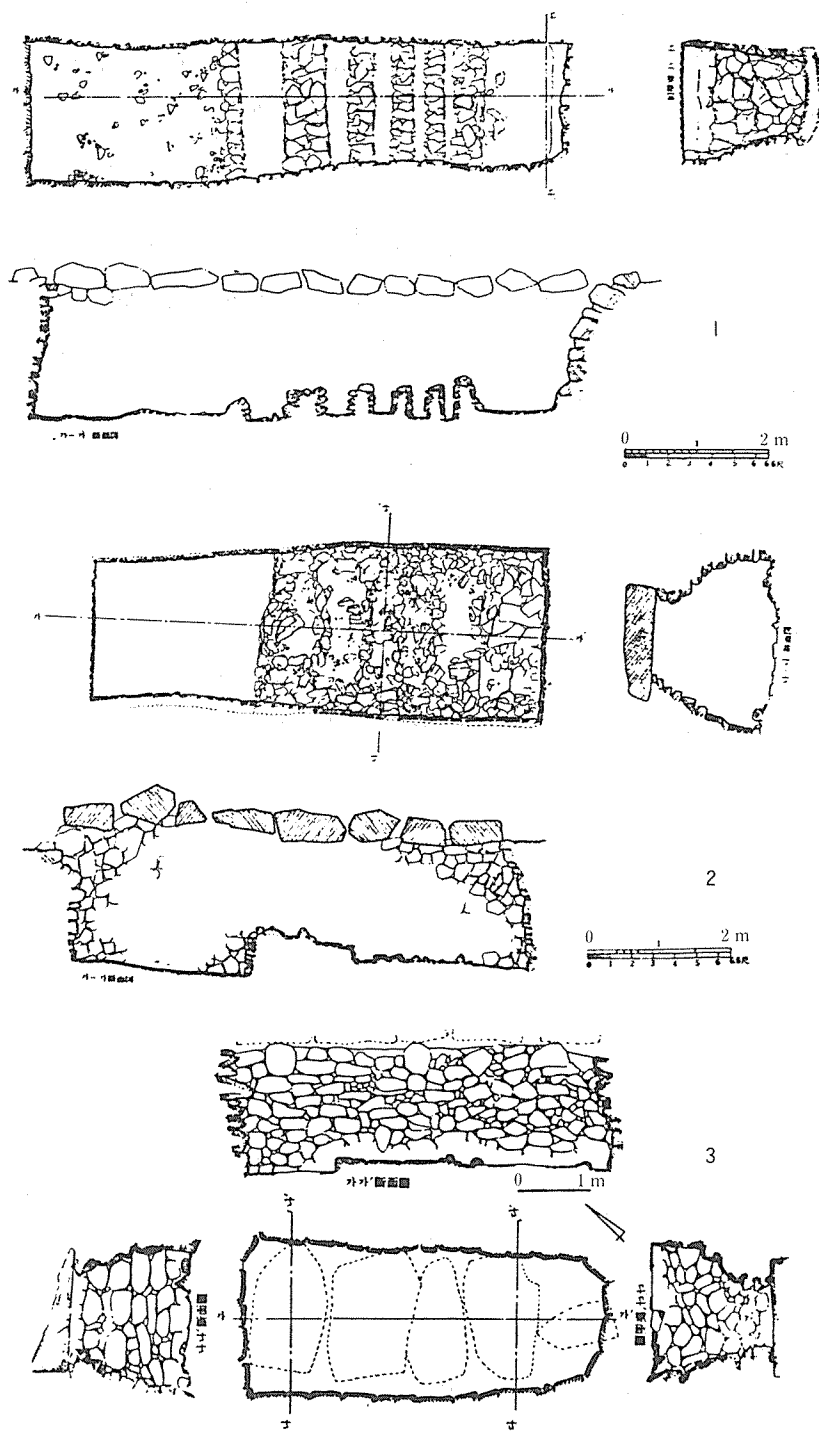
この地域には他に竪穴式石室をもつ古墳も多いようである。

2. 義城地域では、塔里古墳第1墓槨がそうである。^(註7)封土中に石室は5基あるが、第1墓槨のみが竪穴系横口式石室で、その他は竪穴式石室である。第1墓槨の石室は長さ3.50m、幅1.70m、高さ1.80mで、四壁はすべて方形塊石を用いて構築し、入口となっている南壁を除いてす



第1図 竪穴系横口式石室古墳分布図

1、安東地域 2、義城地域 3、善山地域 4、漆谷地域 5、星州地域 6、大邱地域 7、高靈地域 8、玄風地域 9、昌寧地域 10、咸安地域 11、梁山地域 12、慶州地域 13、錦山地域 14、大徳地域 15、論山地域



第2図 安東造塔洞古墳東槨(1)、西槨(2)、中佳邱洞古墳(3)、石室実測図

べて壁は垂直になっている（第3図1）。

3. 善山地域では、善山洛山洞^(註8)28号墳が^(註9)そうである。洛山洞28号墳は直径約13mの円墳で長さ約7m、幅1.70mの石室をもっている。四壁はすべて自然石を使用している。石室内には板石を組みあわせた石棺が2列に2つずつ、計4個置かれている。第3石棺には自然石の一部を加工した石枕が2個おかれていた。

4. 漆谷地域では、若木古墳^(註10)、仁同面黄桑洞1、2号墳^(註11)がある。若木古墳は直径約21mの円墳で、竪穴系横口式石室と小石槨が1基ずつある。石室は長さ5.80m、幅1.35mの大きさで、四壁は花崗岩質の板石を立て、入口である東短壁は長目の川石を一段つみ、その上に大きな板石を1枚たてて閉塞している。床面は入口側1.5mは小さなジャリを敷き、その奥の方はやや大きな石を敷き、区別している（第3図2）。

仁同面黄桑洞1号墳は長径23mの円墳で、石室の大きさは長さ5.80m、幅1.10mである。東西両長壁は方形塊石状割石を垂直につみあげ、南北両短壁は方形ないし長方形の板石を二、三段つみ、その上に大きな板石をそれぞれ立てている。入口は第3図3にみるように板石の状況からBの側であったと思われる。床面には塊石と板石によってつくられた棺台が長軸にそって1基ある。同2号墳は長径32mの大形の円墳で、石室は長さ5.60m、幅1.0mの大きさである。石室の構造は1号墳と同様であるが、床面は扁平な川原石を敷いただけである。

5. 星州地域では、星山洞1号墳、2号墳^(註12)、6号墳、月恒面水竹洞古墳^(註13)がある。星山洞1号墳は直径約13.5mの円墳で、石室は長さ約3.6m、幅1.35mの大きさである。四壁は割石を用いて構築し、南北両長壁及び、西短壁はほぼ垂直につんでいるが、東短壁のみ壁面が凸凹しており、外側から積んだことがわかる。床面は小さな割石を二、三重積んでいる（第4図1）。

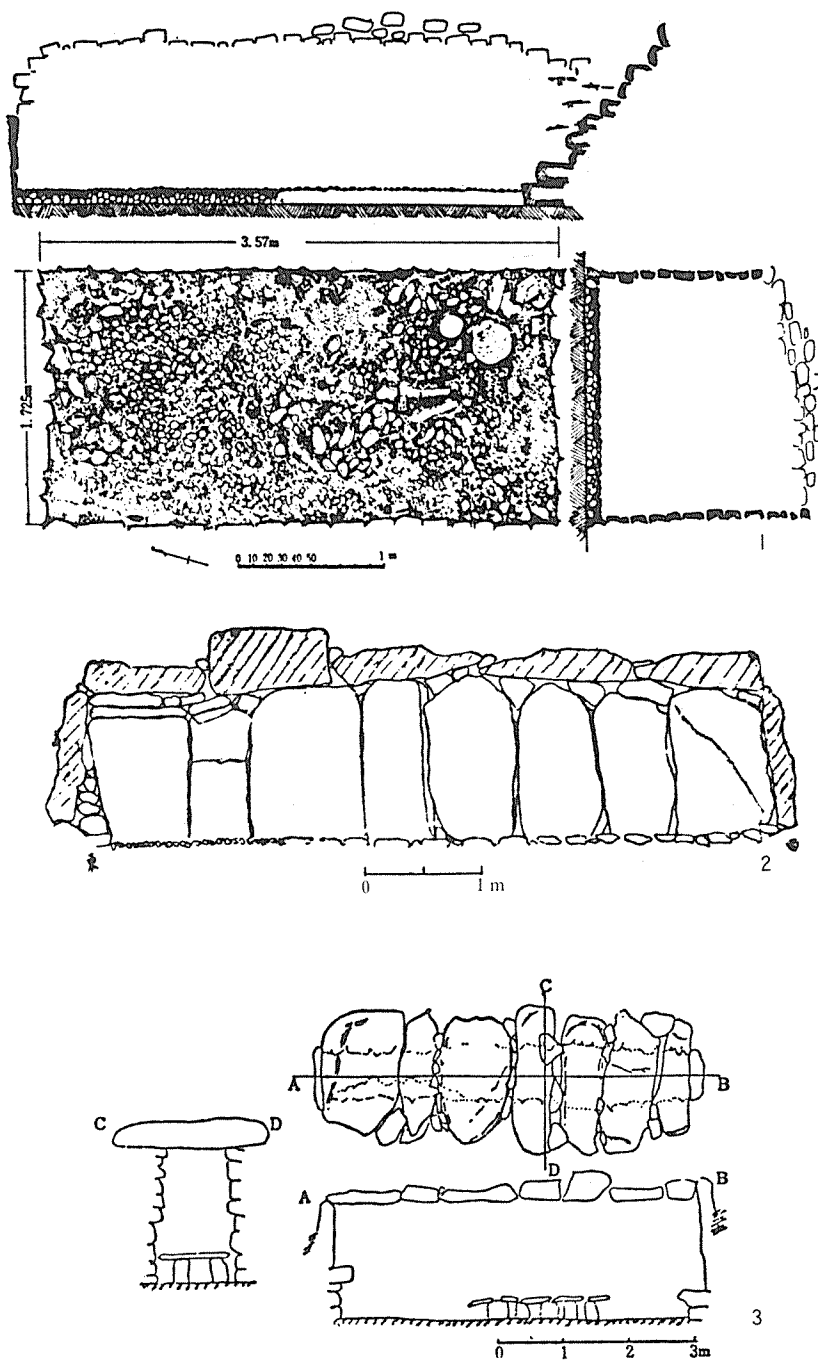
同2号墳は直径約27mのやや大形の円墳で、墳丘内に石室が三つあり、主室が竪穴系横口式石室で、他は竪穴式石室である。主室は長さ約3.42m、幅約1.4mの大きさである。四壁は割石をほぼ垂直に積み上げているが、南短壁のみやや外傾し、ここが入口と思われる。床面は約15cmの厚さに小さな割石を二、三重に敷いている。

同6号墳は直径約9mの円墳で、石室は長さ約3m、幅約0.9mの大きさである。四壁は割石を小口積みにしている。両長壁はやや内傾し、北短壁は垂直に立ち、南短壁は上部がやや外傾し、ここが入口と思われる。床面は栗石を約15～18cmの厚さに敷いている（第4図2）。

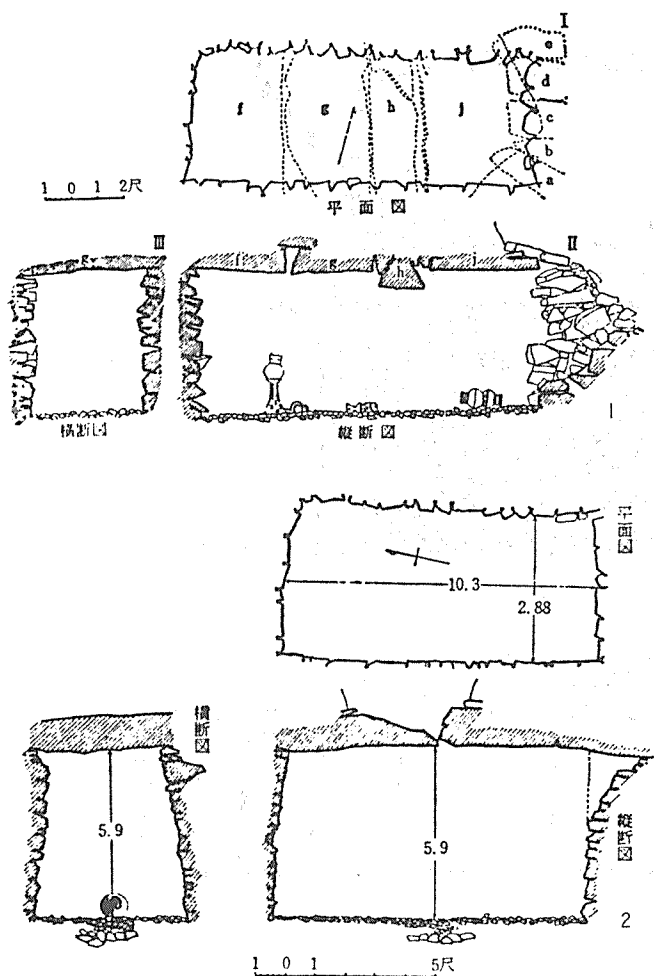
月恒面水竹洞では大正6年度の調査の際、148基の古墳が確認されており、本古墳はそのうちの1基である。しかし、残念なことにその詳細はわからない。

6. 大邱地域では達西34号墳、37号墳、55号墳などがある。^(註14)

34号墳は直径約10.5mの円墳で、竪穴系横口式石室である主室（第1石槨）と小石槨2基が確認されている。第1石槨は長さ3.9m、幅1.23mの大きさで、奥壁側がやや幅広い。四壁は自然石と割石を混用し、両長壁と奥壁はやや内傾し、西南短壁のみが垂直ないしやや外傾して



第3图 義城塔里古墳第1墓槨(1)漆谷若木古墳(2)
同仁同面黄桑洞1号墳(3)石室実測図



第4図 星州星山洞1号墳(1)同6号墳(2)石室実測図

室と同じように河原石を敷きつめている(第5図1、2)。

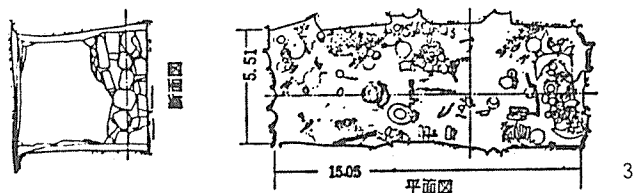
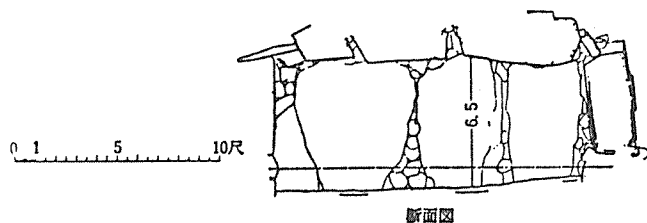
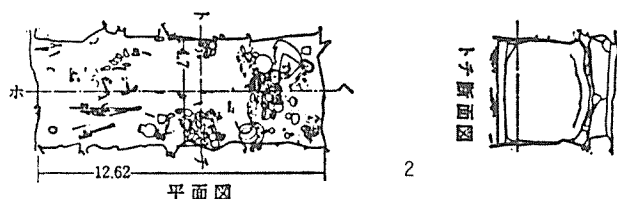
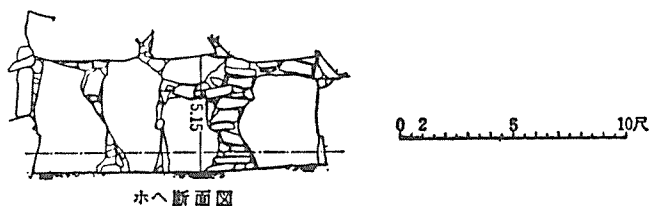
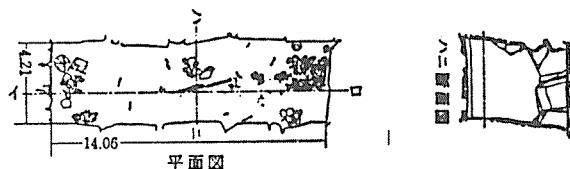
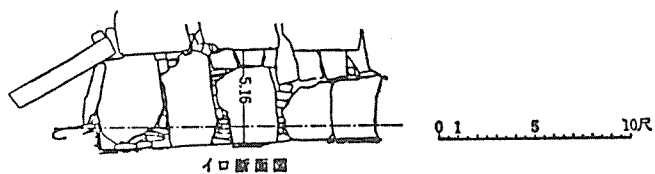
55号墳は直径約18mの円墳で、石室は長さ約4.5m、幅1.67mの大きさである。石室の構造は、両長壁は大きな板石をそれぞれ三枚ずつ立て、そのすきまに河原石をつめこんでいる。両短壁はともに下部に河原石を二段つみ、その上に板石を一枚立てている。そして、入口側はその上部のすきまに河原石をつめ、外から粘土をぬっている。床面は7～8cmくらいの割石を敷きつめている(第5図3)。

7.高霊地域では確実なものは知らないが、主山39号墳がそのように発表されている。^(註15)

8.玄風地域では第1群第1号墳^(註16)がある。円形の封土中に二石室があり、第1石室は長さ約2m、幅2m、高さ1.24mのほぼ方形の平面プランをなす。四壁は自然石を不規則に積みあげて

いる。床面はこぶし大の玉石を約12cmの厚さに敷いている。

37号墳は直径約20mの円墳で、封土内に二つの石室がほぼ平行につくられている。第1石室は長さ4.27m、幅1.27mの大きさで、三壁は花崗岩の板石を立てなれば、その間隙には割石をつめこみ、その上に粘土をぬっている。他の一壁(西短壁)は河原石を三段につみ、その上に大きな板石を立て、更にその上にもう一枚大板石を斜めに立てかけている。床面は7～8cmくらいの方の大きさの河原石を厚さ10cmほど敷きつめている。第2石室は長さ約3.8m、幅約1.41mの大きさで、その構造は第1石室とほぼ同様であるが、入口の大板石は一枚のみである。床面も第1石



第5図 大邱達西37号墳第1石室(1)第2石室(2)
同55号墳石室(3)実測図

構築し、その表面に粘土を塗っている。両長壁はやや内傾し、入口ははっきりしないが、北短壁と考えられている。

おり、両側壁の一方は垂直に、他方は上部を内傾させて積んでいる。残りの二壁ははっきりしないが、ほぼ垂直につまれているようである。入口は東北壁と推定されている。第2石室は破壊されており、不明である。

9. 昌寧地域では松峴洞第1群第2号墳、
第8号墳^(註17)、校洞21号墳、
31号墳^(註18)、桂城A地区1
号墳、2号墳、4号墳、
9号墳^(註19)、C地区5号墳、
9号墳、14号墳、15号
墳^(註20)などがある。^(註21)

松峴洞第1群第2号墳の石室は長さ約6.39m、幅約1.41mの大きさで、四壁は方形塊石を積みあげ、東西両長壁は上部が内傾している。入口は北短壁で、塊石を天井石の側面に達する高さまで積んでいる。同8号墳の石室は長さ約8.4m、幅1.5mの大きさで、四壁は比較的大形の自然石で

校洞21号墳は直径約11mの円墳である。長さ6.45m、幅1.47mの大きさと、四壁は小形の割石を積みあげて構築し、奥壁上部は少し内傾する。入口は北短壁であるが、破壊されていてよくわからない。床面は礫石を敷いている。

同31号墳は直径16.5mの円墳である。石室は長さ5.55m、幅1.44～1.2mの大きさと、入口を除く三壁は21号墳と同様、花崗岩の割石を積み、両長壁はやや内傾する。入口部は北西の短壁で、他三壁と異なり、2個の大石を上下に置き、そのすきまに小石をつめて閉塞している。床面は石室のほぼ中央に長さ約2.54m、高さ奥壁側で約30cm、入口側で約18cmの礫石による棺台をつくっている。遺物のうち土器類は棺台と奥壁の間の低い部分に主に置かれていた（第6図1）。

桂城A地区では9基の古墳が確認され、そのうち4基が竪穴系横口式石室で、他は竪穴式石室4基、小竪穴式石室1基であった。1号墳は直径約15mの円墳で、A地区の中では最も大きく、その位置等から、その群中の主墳と思われる。石室は長さ5.70m、幅1.93mの大きさと、四壁は割石をつんでいる。両長壁は内傾している。入口は西南短壁で、下から三段は他の三壁と同じように積んでいるが、その上部の積み方が異なる。床面は約25cmの厚さに大小礫石を全面に敷きつめ、棺台は2基ある（第7図）。

同2号墳は直径約8mの円墳である。石室は長さ3.22m、幅1.01mの大きさと、四壁は不ぞろいの礫石を利用して構築している。両長壁は上部が内傾している。床面は入口側約70cmを残して全面厚さ15cm程度に礫石を敷きつめている。

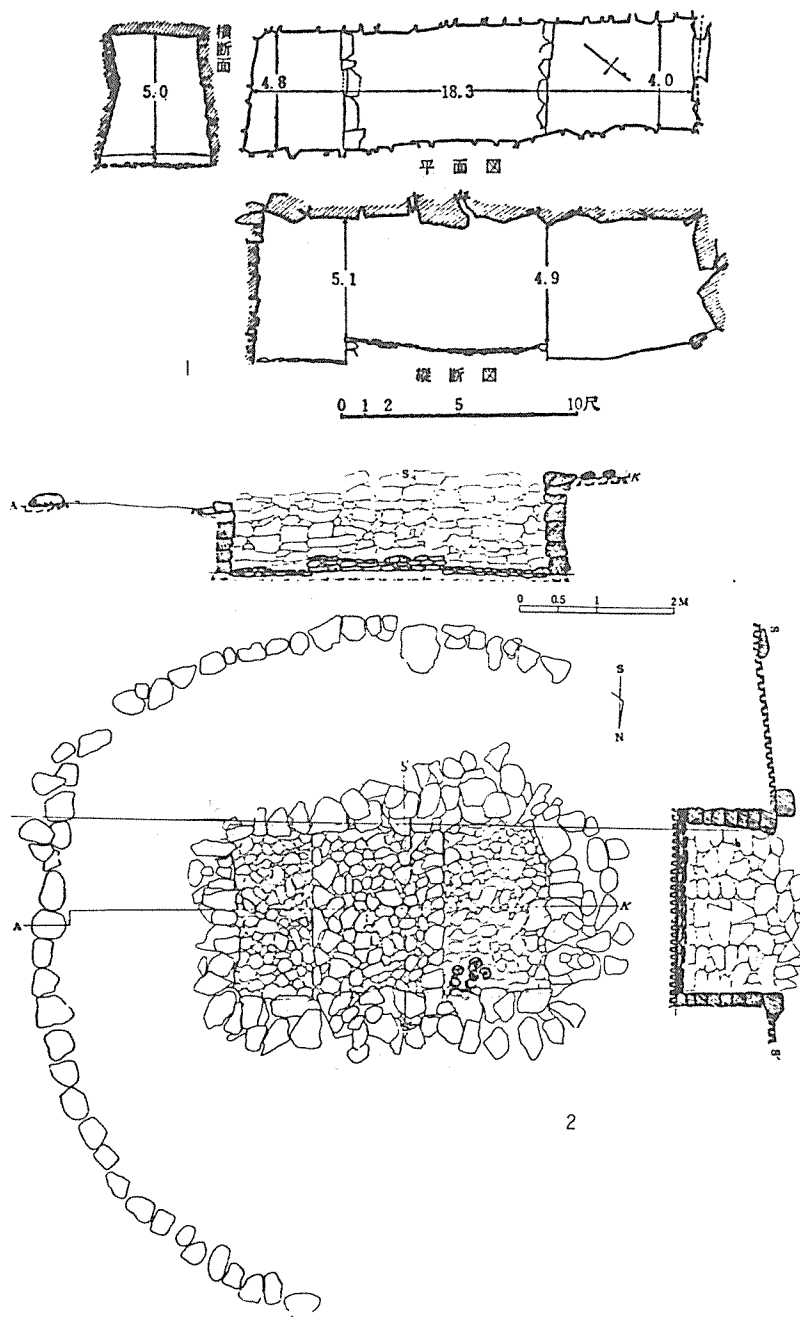
同4号墳は直径8.6mの円墳で、石室は長さ3.56m、幅1.20mの大きさである。四壁は自然石を用いて構築し、両長壁は上部が内傾する。床面は一度全面に割石を敷き、更に、奥壁側65cm、入口側30cmを残して中央部にだけもう二層小石を敷いて棺台としている。

同9号墳は直径約7mの円墳である。石室は長さ3.55m、幅1.55mの大きさと、扁平な自然石を利用して四壁を構築している。かなり破壊されているが、両長壁の上部は内傾するようである。床面は厚さ10cmくらいに平らな礫石をほぼ全面に敷き、奥壁側ではその上に更に大きな板石を置き、棺台としている。

桂城C地区には15基の古墳があり、そのうち4基が竪穴系横口式石室で、他は竪穴式石室である。5号墳の石室は長さ3.25m、幅1.82mのやや幅広い長方形をなし、四壁は礫石と割石を混用して構築している。両長壁は上部において少し内傾している。床面はほぼ全面礫石を敷いているが、東短壁（奥壁）から幅72cmは石が大きく、他より少し高くなっている。入口は片袖状を呈し、南壁側には袖石状のものが立っている。

9号墳の石室は長さ約3.16m、幅1.2mの大きさと、四壁は割石と礫石を混用し、長壁上部は内傾している。入口は南西短壁である。床面は奥壁側に礫石が見られる。

14号墳の石室は長さ3.65m、幅1.35mの大きさと、四壁は割石と礫石を混用して構築してい

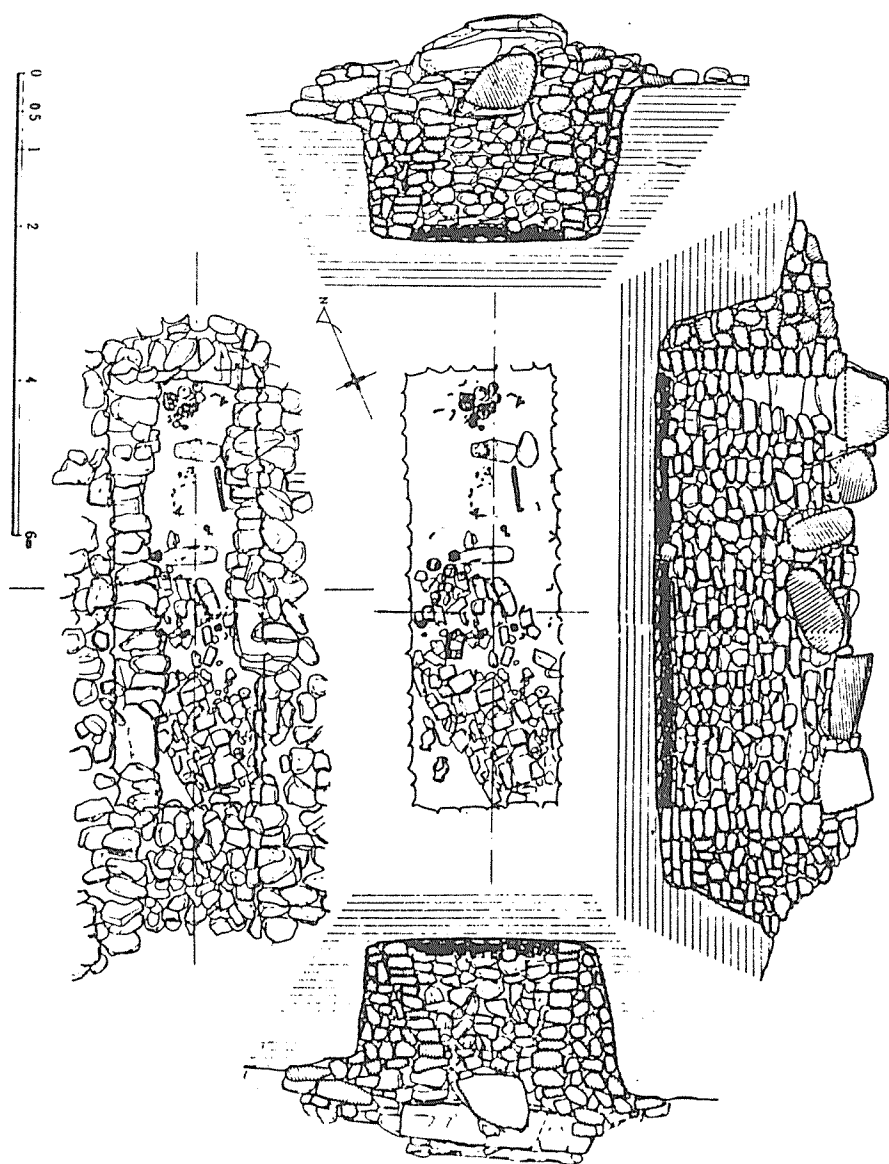


第6図 昌寧校洞31号墳(1)同桂城C地区15号墳(2)石室実測図

利用するのではなく、中央部幅約70cmを入口として構築している。袖石はないが、門状を呈している。床面は全面石敷きであるが、中央部のみ高く、整然と積まれ、棺台としている（第6図2）。

る。床面は割石、河原石を敷いているが、中央部が両短壁側より少し高く、棺台にしているようである。

15号墳は直径約9.5mの円墳で、石室は長さ3.94m、幅2.25mのやや幅広の長方形である。四壁は割石と礫石を混用して構築しており、入口は西短壁である。本古墳の石室は今まで見てきたものとは異なり、短壁全面を入口に



第7図 昌寧桂城A地区1号墳石室実測図

10. 咸安地域では末伊丘や道項丘等に古墳群があるが、そのうち咸安34号墳が^(註22)竪穴系横口式石室である。直径40m、高さ10mの大円墳で、石室は南北に長軸をおく長さ約 9.7m、幅1.71m、高さ1.65mの長方形である。四壁は割石を小口積みにして垂直につみあげ、その表面には粘土を塗った痕跡がある。南短壁が入口らしく、その外部に割石を厚く積み重ねている。また、東西両壁にそれぞれ2個、北短壁に1個、計5個の龕がある。更に注意を要することは壁面上隅に先端が鉤状を呈した鉄釘3～4個が遺存しており、帳幕を垂らしたものと推測されている。

11. 梁山地域では梁山夫婦塚がある。本古墳は直径54m、高さ 8.1mの大円墳である。石室は長さ5.37m、幅2.25m、高さ2.55mの大きさで、四壁は径30cm前後の自然石を積みあげ、両長壁は上部が内傾している。入口は西短壁で、下から約90cmの所に幅約1.56m、高さ約 1.5mの大きさの窓状を呈し、そこを外側から不規則に塊石で閉塞している。床面は全面に玉砂利を敷き、中央部やや奥壁よりに長さ2.76m、高さ0.75mの棺台を作っている。この棺台は本来現存幅の半分程度であったものを改築して第8図1に見られるような形にしたものと思われる。遺体は棺台上に夫婦と思われる2体があり、また、入口側の床面に横位に3体おかれていた。

12. 慶州地域ではこれまで数多くの古墳が調査されているが、^(註23)^(註24) 堅穴系横口式石室をもつ古墳は151号墳が知られるのみである。直径40mの円墳で、中央部から長方形の石室、そしてその南東数mの所から積石木槨が1基確認されている。石室は長さ4.34m、幅2mの大きさで、四壁は粘板岩の割石を用いて構築し、両長壁は上部がやや内傾する。入口は南短壁である。また、北壁に接して高さ0.35m、奥行2.21mの横位の割石積み棺台が作られており、その状況から3回の追葬がなされたことがわかる。本古墳内の埋葬順序は、その位置からまず石室が作られ、そのあと積石木槨が作られたものと推定されている^(註25) (第8図2)。

13. 錦山地域では上佳里古墳がある。石室は長さ3.26m、幅 0.9m、高さ1.24mの大きさで、^(註26) 四壁は割石で構築している。両長壁は上部が内傾し、両短壁も上部がやや内傾するが、北西短壁のみ壁面が粗く、外側から閉塞したものと考えられている。床面は地山上に粘土を敷きつめただけである。

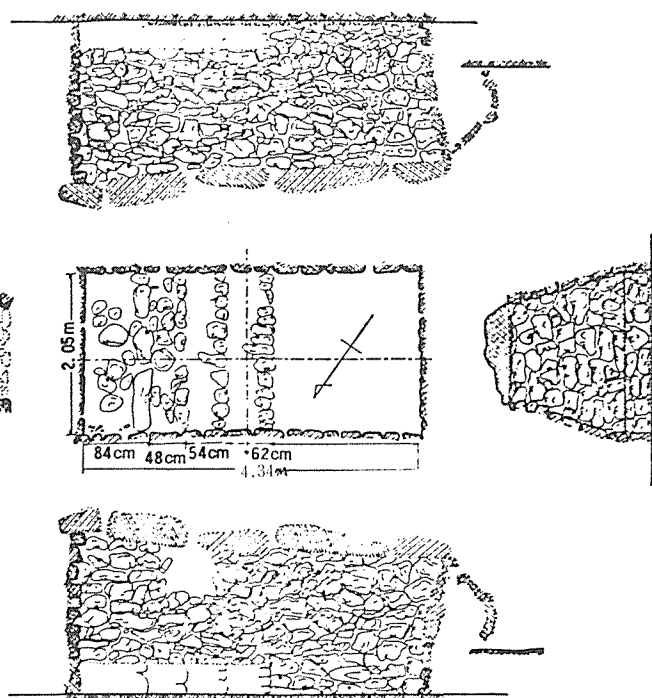
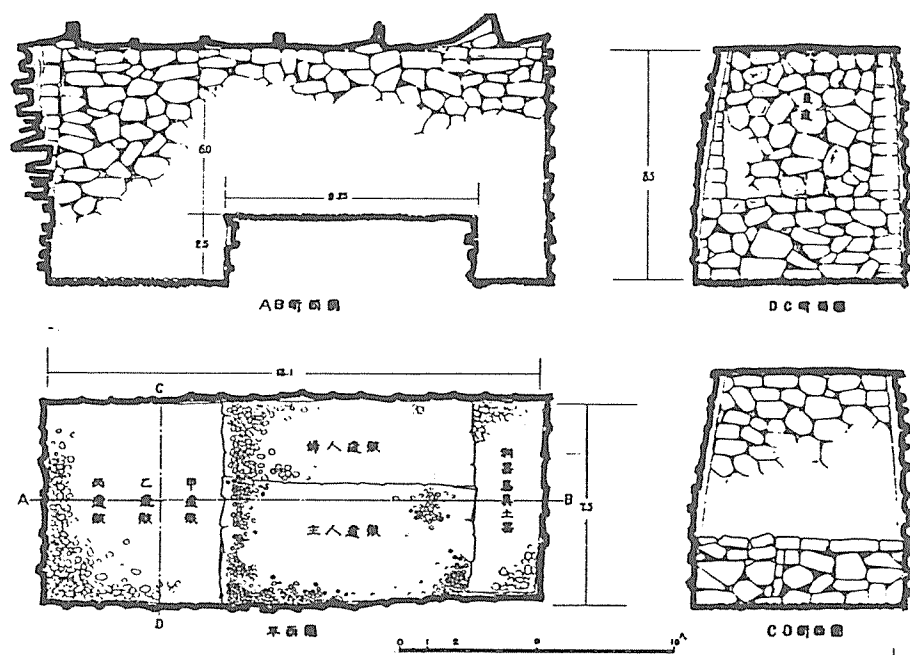
14. 大徳地域では古墳の調査はほとんどなされていなかったが、1977年、78年に注山里において12基の石室墳が発掘調査された。そのうちわけは堅穴系横口式石室6基、^(註27)^(註28) 堅穴式石室2基、横穴式石室1基、小堅穴式石室3基である。これらのマウンドはすべて流されてしまっており、その墳形、大きさはわからない。^(註29)

1号墳の石室は長さ2.80m、幅1.20mの大きさで、自然石をつみあげて四壁を構築している。両長壁は上部でやや内傾し、西短壁は垂直に立ち、東短壁は上部が外傾し、ここが入口であることがわかる。床面は長軸にそって西南部に長さ2.40m、幅0.70mの川原石による石敷きがある(第9図1)。

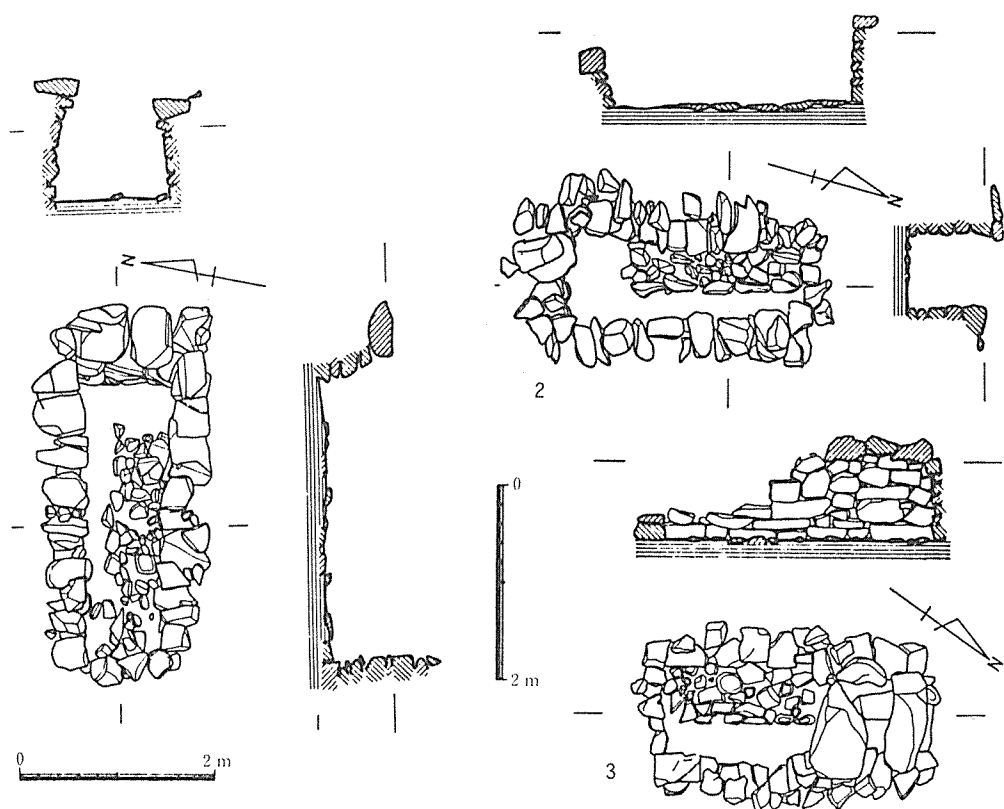
7号墳の石室は長さ2.20m、幅0.8～0.9mの大きさで、自然石を用いて四壁を構築している。入口は南短壁である。床面は西長壁にそって幅60cm、川原石を敷いている。

9号墳の石室は長さ2.30m、幅1.10～1.20mの大きさである。四壁は自然石で構築し、両長壁は上部が内傾する。入口は南短壁である。床面は全面に石を敷いている。

10号墳の石室は長さ2.20m、幅0.9m、高さ1.0mの大きさである。四壁は自然石で積みあげ、両長壁は上部が内傾する。入口は南短壁である。床面は西・北壁にそって長さ1.70m、幅0.60mの範囲に石を敷いている(第9図2)。



第 8 图 梁山夫婦塚(1)慶州151号墳(2)石室実測図



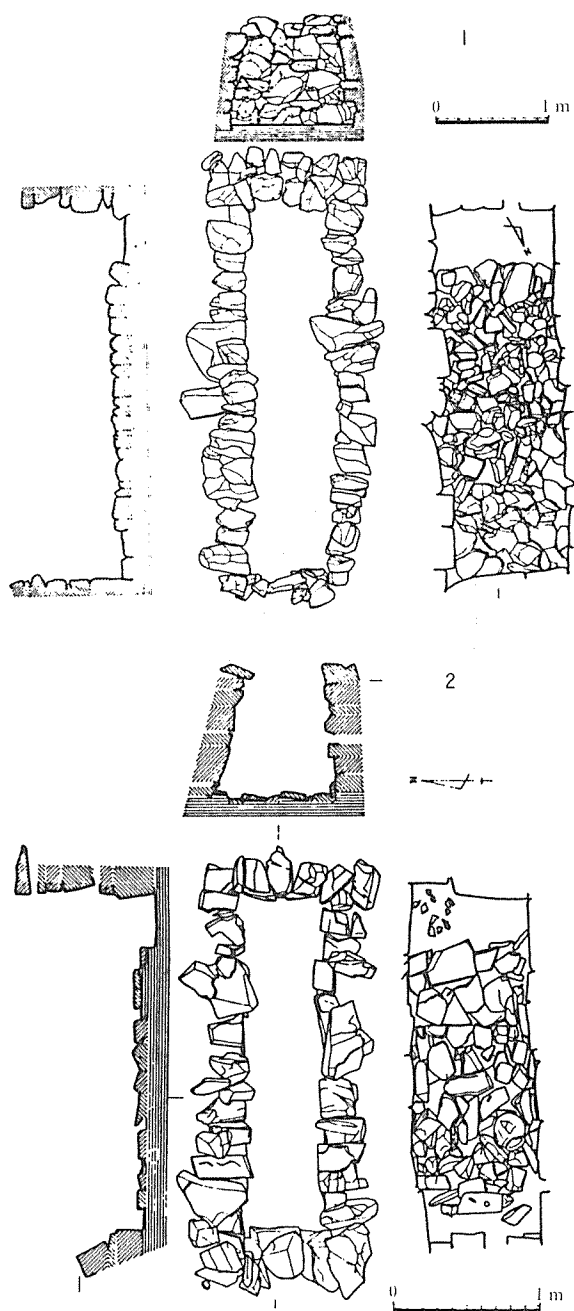
第9図 大徳注山里1号墳(1)10号墳(2)12号墳(3)石室実測図

11号墳の石室は長さ1.60m、幅0.75mの小さなものである。四壁は自然石でつみあげ、両長壁は上部で内傾する。入口は南短壁である。床面は全面に石を敷いている。

12号墳の石室は長さ2.75m、幅 0.9m、高さ 0.9mの大きさである。四壁は自然石で構築し、両長壁上部はやや内傾する。入口は南短壁である。床面は西長壁にそって幅60cm石を敷いている（第9図3）。

注山里古墳群の石室は全般的に小形で、石材は自然石を用い、両長壁は上部で内傾している。入口は古墳群が南斜面にあるためか、南北に長軸がある場合、南短壁である。1号墳のみ東西軸で東短壁が入口になっている。床面は全面ないしは一方の長壁にそって石を敷いている。

15. 論山地域では表井里にみられる。この古墳群は表井里A区古墳群で、山^(註30)の南斜面につくられており、数十基あるうちの13基が調査された。そのうちわけは竪穴系横口式石室10基、横穴式石室2基、小竪穴式石室1基である。すべてマウンドは流されており、その墳形、大きさなどはわからない。



第10図 論山表井里A区1号墳(1)3号墳(2)
石室実測図

mの大きさである。四壁は塊石を用いて構築し、両長壁は内傾している。入口は南短壁で、下にやや大きめの石をおいて閉塞している。床面は入口側30～40cmを除いて全面に石を敷いている。

1号墳の石室は長さ3.50m、幅0.9m、残存高0.85mの大きさである。四壁は塊石を用いて構築し、両長壁上部は内傾する。入口は西短壁である。床面は入口側45cmは土で、他は10～20cm大の石を敷き、特に中央部分は奥壁側35cmまでの部分より一段高く、奥壁側の低い部分に土器などの副葬品が置かれていた(第10図1)。

2号墳の石室は長さ2.86m、幅0.95m、残存高0.82mの大きさである。四壁は塊石で構築し、両長壁上部は内傾する。入口は西短壁である。床面は中央部分(西短壁から55cm、東短壁から28cm)のみ石を敷き、他は土のままであった。

3号墳の石室は長さ2.25m、幅0.80m、高さ0.85mの大きさである。四壁は塊石を用いて構築し、両長壁上部は内傾する。入口は西短壁である。床面は中央部に石を敷き、奥壁側は一段低く、土のままで、そこに副葬品を置いていた(第10図2)。

4号墳の石室は長さ2.40m、幅0.68～0.86m、残存高0.85

5号墳の石室は長さ2.50m、幅0.85m、残存高0.82mの大きさである。四壁は塊石で構築されているが、西短壁のみ下部にやや大きめの石を2個置き、その上に20～30cm大の塊石を乱雑に積んでいる。この西短壁が入口である。床面西側は破壊されており、わからないが、東短壁側約40cm以外は石を敷いていた。

7号墳の石室は長さ2.65m、幅0.84m、高さ1.02mの大きさである。四壁は塊石で構築しているが、西短壁を除く三壁は下部にやや大きめの石（30～50cm）を使用していた。西短壁は下から上まですべてやや小さめの石を使用し、その積み方も他三壁と異なり、ここが入口であると推測できる。しかし、東西両短壁の中央やや上部に龕と思われる小孔が1個ずつあることは注意を要する。両長壁の上部は内傾する。床面は全面石敷きであった。

8号墳の石室は長さ3.40m、幅約1.00m、高0.95mの大きさである。四壁は塊石で構築し、長壁上部は内傾する。入口は石の積み方から西短壁と推測された。床面は西壁側50cmは土で、他は石敷きであるが、1号墳同様東壁側が一段低く、ここに副葬品を置いていた。

9号墳の石室の大きさは長さ2.20m、幅0.64m、高さ0.74mとやや小形である。四壁は塊石を使用し、両長壁はやや内傾する。入口は西短壁である。床面は東壁側20cm、西壁側40cmが土で、中央部が高さ約10cmの石敷きとなっている。

10号墳の石室は長さ3.00m、幅0.92m、残存高0.78mの大きさである。四壁は塊石で構築し、両長壁は上部で内傾する。入口は西短壁である。床面は1号墳、8号墳と同様、西壁側約40cmが土で、他は石敷きであるが、東壁側が中央部より約10cm低い。

11号墳の石室の大きさは長さ2.70m、幅0.85m、残存高0.90mを測る。四壁は塊石で構築し、両長壁は上部でやや内傾する。入口は西壁である。床面は東壁側30cmが土で、西壁側もそのようであるが、東壁側のような中央部石敷きとの明確な区画ラインはない。

以上のごとく、表井里A区古墳群の竪穴系横口式石室は塊石を用い、両長壁上部をやや内傾させて三壁を構築したあと、南または西側の短壁から遺体等を納置し、そしてそこを外側から閉塞したものである。床面はだいたい中央部に石を敷き、棺台とし、あるものは奥壁側にもやや低く石を敷いている。副葬品は主に奥壁側の低い部分に置かれていた。

3

以上、朝鮮半島南部の竪穴系横口式石室古墳の石室構造を見てきたが、それらを整理してみると次のようになる。

I. 塊石や割石で三壁を構築し、両長壁が上部で内傾し、入口は短壁全面を使用する。この類の石室は入口の閉塞方法によって次の二つに分かれる。

A. 塊石や割石で閉塞するもの

B. 板石や大石で閉塞するもの

更に、床面の状況によって六つに分けることができる。

- a. 短壁にそって棺台をつくるもの
- b. 長壁にそって片側に棺台をつくるもの
- c. 長壁にそって中央部に棺台をつくるもの
- d. 全面に石を敷くもの
- e. 石を敷かず、土のままのもの
- f. その他

II. 板石を主に用いて四壁を構築するもの

III. 塊石や割石を用いて四壁を構築するが、それらが入口部を除いてほぼ垂直に立つもの

IV. 塊石や割石を用いて四壁を構築するが、入口が短壁全面を使わず、門状を呈するもの

まず、I類の石室は安東、大邱、玄風、昌寧、善山、星州、慶州、錦山、大徳、論山の各地域でみられ、数的には最も多い。そして、その中で閉塞を塊石や割石で行うI A類が最も多い。板石や大石で閉塞するI B類の石室は漆谷黄桑洞1号墳、2号墳、昌寧校洞31号墳であるが、これらはII類と関連があるのかもしれない。

床面の状況から見てみると、慶州 151号墳の石室は安東造塔洞古墳の石室と類似し、百濟地域の大徳、論山の例は昌寧のものに近い。

^(註31)
II類は大邱達西、漆谷若木でみられる。

III類はわずか2例で、義城塔里古墳と咸安34号墳である。どちらも他とは趣が異なる。

IV類は竪穴系横口式石室ではあるが、上記I～III類とは入口の構造が違う。梁山夫婦塚は石室床面から高さ約90cmの所に幅約1.5mの入口を作り、また昌寧桂城C地区15号墳は石室床面と明確な段差はないが、石室幅2mに対し、中央部に幅約70cmの入口を作っている。同5号墳は片袖状を呈し、南壁側には袖石状のものが立っている。

次に、全体の分布を見ると、やはり中心は洛東江流域である。それも東岸、西岸の区別はなさそうである。百濟地域では忠清南道の東南部で見られるが、これらと伽耶地域との関係は忠清道、慶尚道、全羅道の百・新・伽三国の境域の古墳の調査をまたなければならないであろう。

慶州の例は、今まで知られている慶州地域の古墳の中に一つしかないもので、特異性が目につく。そして上述したごとく慶州 151号墳の石室の構造は安東造塔洞古墳の石室とよく似ていることも興味あるところである。

4

竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳はどのような古墳であろうか。まず、墳径をみると、漆谷黄桑洞2号墳、星州星山洞2号墳、咸安34号墳、梁山夫婦塚、慶州 151号墳などは約30m、ないしはそれを越える大円墳である。特に咸安34号墳、梁山夫婦塚、慶州 151号墳は直径40m

を越え、卓越した大古墳といえよう。

石室では、安東造塔洞古墳、中佳邱洞古墳、漆谷黄桑洞1、2号墳、若木古墳、昌寧松岷洞第1群第2、8号墳、校洞21、31号墳、桂城A地区1号墳、善山洛山洞28号墳、咸安34号墳、梁山夫婦塚などは長さ5mを越す大形のもので、そのうち昌寧松岷洞第1群第8号墳は8mを越え、咸安34号墳は約9.7mの長大なものである。

遺物では、義城塔里古墳第1墓槨、漆谷黄桑洞1号墳、大邱達西37、55号墳、梁山夫婦塚などで金銅冠が出土し、他のいくつかの古墳でもそれに相応するような金製耳飾等の貴金属製品が出土している。

以上のように、墳径、石室、遺物等からその地域の首長クラスが竪穴系横口式石室を使用していることがわかる。逆に、小古墳ではどうかとみると、百済地域のものはそのほとんどが石室長3m以下で、遺物も土器や鉄器をわずかにもつ程度である。しかし、伽耶、新羅地域のものはほとんどが長さ3m以上の石室をもっており、百済地域の例と対照的である。ただ、昌寧桂城地区や善山地域の古墳中には副葬品の乏しいものも見られる。

そこでその古墳群中での竪穴系横口式石室をもつ古墳の位置を見てみたい。しかし、古墳群としてまとまって調査されているものは少ない。

安東地域では造塔洞古墳、中佳邱洞古墳のまわりに小古墳があり、それらは竪穴式石室を内部主体としており、両古墳が竪穴系横口式石室を使用しているのと対照的である。

大邱達西地区では調査された古墳の性格によるのかもしれないが、全般的に良好な副葬品をもち、その地域の首長クラスと考えられる。

昌寧地域では、松岷洞古墳群には上記した竪穴系横口式石室のほかに4号墳、6号墳、46号墳が横穴式石室として知られている。^(註34)校洞古墳群ではかなりの数の古墳が発掘されているが、報告されたものが少なく、不明確である。しかし、校洞12号墳は積石木槨墳であり、他は竪穴系横口式石室墳であったといわれている。^(註35)

桂城古墳群A地区では9基の古墳が調査され、竪穴系横口式石室4基、竪穴式石室4基、小竪穴式石室1基であった。そして主墳はその大きさ、位置等から1号墳と考えられるが、これは竪穴系横口式石室を内部主体としていた。他の古墳は2、4、9号墳が竪穴系横口式石室、5、6、7、8号墳が竪穴式石室、3号墳が小竪穴式石室で、その大きさは石室の構造にも関係するのかもしれないが、竪穴系横口式石室はすべて長さ3m以上であり、竪穴式石室は長さ1.55m～3.27mとやや小形であった。また、遺物に関しても竪穴系横口式石室から多く出土し、装身具は竪穴系横口式石室からしか出土していない。

このように桂城A地区古墳群では、明らかに意識して竪穴系横口式石室が使われているようである。

桂城C地区古墳群では15基の古墳が調査されており、竪穴系横口式石室4基、竪穴式石室11

(註36)

基であった。石室の大きさは前者が長さ3.16～3.94mであるのに対し、後者は2.15～3.30mとやや小さい。また、立地の上では竪穴系横口式石室を内部主体とする14、15号墳が頂上部にあり、他を見下ろす形になっている。

大徳注山里では12基の石室が調査され、竪穴系横口式石室6基、竪穴式石室2基、小竪穴式石室3基、横穴式石室1基であった。すべて南向きの同一斜面につくられており、位置的な差はなさそうである。石室の大きさは、横穴式石室である2号墳は玄室長2.70m、幅1.70mであり、竪穴系横口式石室は長さ1.60～2.80m、竪穴式石室は長さ2.60～2.70mと三者規模の上では差はない。また、遺物に関しても全般的に乏しく、差はない。

論山表井里A区では13基の古墳が調査され、竪穴系横口式石室10基、横穴式石室2基、小竪穴式石室1基であった。古墳群の主体は竪穴系横口式石室で、それに横穴式石室が数基あるという状況のようである。竪穴系横口式石室の大きさは長さ2.20～3.50m、幅0.64～1.00mで、床面の石敷きが丁寧な1、8、10号は他に比してやや大きいようである。横穴式石室は12号墳と13号墳である。12号墳は扶余陵山里等で見られる板石を用いた両袖式の長方形石室で、長さ2.65m、幅1.30mの大きさである。遺物としては金銅製耳環が他と異なる。13号墳は塊石を用いて構築した横穴式石室で、両側壁と奥壁は上部で内傾している。羨道は東南に片寄ってつき、幅1.05m、長さ1.30mとやや短い。玄室の大きさは長さ3.20m、幅2.15mである。遺物は土器、鉄器以外に銀張銅製鉸具が1点であるが出土しており、注目される。

このように表井里A区古墳群では竪穴系横口式石室墳の数は多いが、遺物は土器、鉄器のみで、横穴式石室墳が金銅製耳環や銀張銅製鉸具などを有することと異なる。

以上、全体を通してみると、昌寧桂城A地区では竪穴式石室より上位のものが竪穴系横口式石室を使用している。これは安東地域でも同じかもしれない。大邱の場合は比較はできないが、少なくとも遺物等からその地域の首長クラスの人が葬られていたことは間違いないであろう。

逆に、百済地域では不確かではあるが、論山表井里で見限りにおいては横穴式石室の方が良い遺物等を有している。

5

次に、追葬及び、一封土内に複数の埋葬施設をもつことについて考えてみよう。

まず、追葬が行なわれたと思われる古墳は安東造塔洞古墳（東槨、西槨）、同中佳邱洞古墳、義城塔里古墳第1墓槨、善山洛山洞28号墳、梁山夫婦塚、昌寧桂城A地区1号墳、慶州151号墳などがある。これらは本来の横口式の機能、つまり、数次の埋葬を可能にする構造であることを利用している。逆に、残りの古墳のうち状況のわからないものは除くとしても、かなりの数の古墳は追葬は可能であっても何故か追葬はしていないことになる。

次に、一封土内に2個以上の埋葬施設をもつものは、安東造塔洞古墳（2）、義城塔里古墳

(5)、大邱達西34号墳(3)、同37号墳(2)、星州星山洞2号墳(3)、玄風第1群第1号墳(2)、慶州151号墳(2)などがある。造塔洞古墳は2基とも竪穴系横口式石室で、そしてどちらも数次の追葬が行われている。義城塔里古墳は第1墓槨が竪穴系横口式石室で追葬がなされており、そのあと順次4基の竪穴式石室が同一封土内に作られている。達西34号墳は主室(第1墓槨)が竪穴系横口式石室で、他の2基は小石槨であり、第2石槨は主室に直角に位置する。星山洞2号墳は主室が竪穴系横口式石室であり、2基の小竪穴式石室がこれに平行して築かれている。玄風第1群第1号墳は石室が2基あるのはわかっているが、第2石室は破壊されており、その状況はわからない。第1石室が竪穴系横口式石室である。慶州151号墳は竪穴系横口式石室と積石木槨が各1基あり、その位置等から竪穴系横口式石室が先づつくられ、そのあと積石木槨が作られたと推定されている。

このような一封土内に複数の埋葬施設をもつ古墳については有光教^(註37)氏が検討され、家族墓と考えられているが、上記のように、その古墳の中で追葬が行われている例もある。この場合、同一石室内に入る人間と新たに石室等を作って同一封土内に入る人間とはどのような違いがあるのであろうか。家族制度のあり方と関係するのであろうか。一般的に同一石室内に2体あれば夫婦と考えられるが、義城塔里古墳第1墓槨では出土人骨より母子の可能性が考えられている。また、梁山夫婦塚の棺台と入口部の間の床面にある3体の遺体は陪葬の可能性が考えられている。

6

最後に竪穴系横口式石室の年代を考えてみよう。年代に関しては、伊藤秋男氏の耳飾による^(註38)編年が最も安定しているようであるから、ここではそれを基準として見てみる。

まず、I期(4世紀後半～450年頃)に属する耳飾を出土した古墳はない。

II期(450年頃～520年頃)に入るものは、義城塔里古墳第1墓槨、漆谷仁同黄桑洞1号墳、同若木古墳、星州星山洞1号墳、2号墳、大邱達西55号墳、咸安34号墳などがある。

III期(520年頃～634年より以前、およそ600年頃)に入るものは大邱達西34号墳、37号墳、昌寧校洞31号墳、桂城A地区1号墳、梁山夫婦塚、慶州151号墳^(註39)などがある。

IV期(600年頃～700年頃より以前、7世紀後半のいずれかの時点)に入るものは善山洛山洞28号墳がある。

これらをまとめてみると、竪穴系横口式石室は5世紀後半から7世紀代まで作られつづけていたことがわかる。

7

朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室を見てきたが、以下、これらをまとめてみよう。

1. 分布は洛東江を中心とし、東は慶州、西は大徳、錦山、論山まで広がっている。群をなしている所は星州、大邱、昌寧、大徳、論山であるが、昌寧では未調査の古墳を含めてかなりの数の竪穴系横口式石室があるようである。また、慶州 151号墳や高霊の主山39号墳はその地域では現在まで他に竪穴系横口式古墳がなく、要注意の古墳である。
2. 石室構造は大きく4類に分けた。Ⅰ類が最も多く、次にⅡ類、そしてⅢ、Ⅳ類は少ない。Ⅰ類は閉塞方法、床面の状況で細分したが、入口を塊石、割石で閉塞するⅠA類が各地でみられ、最も多い。また、床面の状況をあわせ比較すると、慶州の例は安東造塔洞古墳の石室と類似し、百済地域のものは昌寧のものに近いことがわかった。Ⅱ類は大邱が顕著であるが、漆谷でも見られる。Ⅲ類は例が少なく、特異な形である。Ⅳ類は入口が門状を呈し、横穴式石室により近いものである。

朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室の多くは塊石や割石で両側壁と奥壁をまず構築し、短壁部全面を使った横口から屍体等を納め、そしてその横口部を塊石や割石で閉塞する。また、この両側壁は上に行くにつれて内傾している。

3. 竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳の位置づけについて見てみると、金銅冠等の支配者を象徴する物品をもち、また、大きな石室や墳丘をもつその地域の首長クラスのものがある一方、やっと土器や鉄器をもつ小古墳がある。

まだ資料的に不十分であるためはっきりしたことはいえないが、伽耶地域、特に昌寧桂城A地区では竪穴式石室墳の副葬品に比べて、竪穴系横口式石室墳の副葬品の方が良かった。逆に、百済地域の論山表井里A区では横穴式石室墳の方が竪穴系横口式石室墳より高価な副葬品を有していた。石室の採用において何らかの意識、力(?)が働いていたのであろうか。

4. 竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳において、追葬と一封土内に複数の埋葬施設をもつことが共存する場合がある。
5. 年代に関しては、伊藤秋男氏の編年によった。それによると、5世紀後半から7世紀にかけて築造されたことがわかる。その中で、5世紀に入るものは、現時点では伽耶地域に限られ、百済、新羅地域のものは6世紀代に入るようである。

(1980.9.26了)

引用図

- 第2図 1、2、註(5)文献 3、註(6)文献
 第3図 1、註(7)文献 2、註(10)文献 3、註(11)文献
 第4図 1、2、註(12)文献
 第5図 1、2、3、註(14)文献
 第6図 1、註(18)文献 2、註(20)文献
 第7図 註(19)文献
 第8図 1、註(23)文献 2、註(25)文献

第9図 1、2、3、註(20)文献

第10図 1、2、註(20)文献

以上の図のうち、第3図1、3、第4図1、2、第5図1、2、3、第6図1は金基雄『伽倻の古墳』1978
学生社に利用されている図、第8図2は金基雄「古墳の変遷」金廷鶴編『韓国の考古学』1972 河出書房新社
に利用されている図を再利用させていただいた。

註

- (1) 竪穴系横口式石室については、石山勲他『片山古墳群』1970、柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開—平面図形と尺度について—」『九州考古学の諸問題』1975、小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座』4 1980などが、日本のものを検討している。
- (2) 全吉姫「伽耶墓制の研究」『梨大史苑』3 1961。
- (3) 全氏論文では、羨道のない横穴式石室となっている。
- (4) 高句麗地域では、咸鏡道安辺、竜城里古墳、上細洞古墳等が竪穴系横口式石室をもつようである。『朝鮮古蹟図譜』3 1916。
- (5) 秦弘燮『造塔洞古墳発掘調査報告』1975。
- (6) 秦弘燮『中佳邱洞古墳発掘調査報告』1977。
- (7) 金載元、尹武炳『義城塔里古墳』1962。
- (8) 今西竜「洛山洞第二十八号墳調査記」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (9) この他に禿山洞1号墳、同2号墳が横口式石室として報告されているが、これらは百濟扶余陵山里等でみられる長方形の横穴式石室に類似する点もあり、入口部の状況が明らかではないのでここでは一応保留しておく。伊藤秋男「韓国慶尚北道善山古墳群（Ⅰ）」『南山大学人類学研究所紀要』5 1976。
- (10) 尹容鎮『若木古墳調査報告—大甕塚発掘報告—』1961。
- (11) 金英夏、尹容鎮「漆谷郡仁同面黄桑洞古墳調査報告」「仁洞・不老洞・高靈古衙古墳発掘調査報告」1966。
- (12) 浜田耕作、梅原末治「慶尚北道星州郡古墳」『大正七年度古蹟調査報告』1922。
- (13) 今西竜「月恒面水竹洞古墳群」『大正六年度調査報告』1920。
- (14) 小泉顕夫、野守健『大正十二年度古蹟調査報告』第一冊、1931。
- (15) 伊藤秋男「韓国慶州古墳群における石室墳の編年について—慶州皇南洞第151号墳の研究—」『古代文化』25-11 1973。
- (16) 今西竜「達城郡内旧玄風郡地方」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (17) 今西竜「邑内面古墳」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (18) 浜田耕作、梅原末治「慶尚南道昌寧郡古墳」『大正七年度古蹟調査報告』1922。
- (19) 鄭澄元「A地区古墳発掘調査報告」『昌寧桂城古墳群発掘調査報告』1977。
- (20) 沈奉謹「C地区古墳発掘調査報告」『昌寧桂城古墳群発掘調査報告』1977。
- (21) このほか、校洞1、7、10、11号墳も竪穴系横口式石室ではないかと考えられているが、はっきりしない。
また、桂城B地区にもあるようであるが、確認できなかった。
- (22) 今西竜「咸安第三十四号墳調査記」『大正六年度古蹟調査報告』1920。
- (23) 馬場是一郎、小川敬吉『梁山夫婦塚と其遺物』1927。

- (24) 梁山夫婦塚以外に梁山中部洞においても竪穴系横口式石室または横穴式石室があるとのことである。大韓民国文化公報部『文化財大観』史蹟篇上 1975。
- (25) 朴日薫「皇南里 151号墳」『慶州皇吾里第 1・33号、皇南里第 151号古墳発掘調査報告』1969。
- (26) 註(15)に同じ。
- (27) 姜仁求「錦山の古墳と土器類」『百済研究』4 1973。
- (28) 尹武炳「注山里古墳群発掘調査」『大清ダム水没地区遺蹟発掘報告書（忠清南道篇）』1978。
- (29) 竪穴系横口式石室の可能性のあるものもある。
- (30) 尹武炳「連山地方百済土器の研究」『百済研究』10 1979。
- (31) このような板石で構築された石室を厳密な意味で竪穴系横口式石室と呼ぶのはやや躊躇するが、他例との関係から小稿では含めた。
- (32) 註(5)、註(6)。
- (33) 註(14)と同じ。
- (34) 斎藤忠『朝鮮古代文化の研究』1943。
- (35) 梅原未治『朝鮮古代の墓制』1947・穴沢味光、馬目順一「昌寧校洞古墳群－「梅原資料」を中心とした谷井済一氏発掘資料の研究－」『考古学雑誌』60－4 1975。
- (36) 古墳は11基であるが、一封土内に数基石室をもつものがあり、石室数は15基である。ただし、そのうち2基は小竪穴式石室である。また、3号墳は図面で見える限りにおいて、竪穴系横口式石室の可能性がありそうである。
- (37) 有光教一「南鮮に於ける多櫛式高塚古墳に就て」『史林』28－1 1961。
- (38) 伊藤秋男「耳飾の型式学的研究に基づく韓国古新羅時代古墳の編年に関する一試案」『朝鮮学報』64 1972
- (39) 梁山夫婦塚の年代に関して、藤井和夫氏が「梁山夫婦塚出土陶質土器の編年に就いて一伽耶地域古墳出土陶質土器編年試案Ⅰ」『神奈川考古』3 1978において土器を検討して530年～560年と推定している。

(岡山理科大学人類学教室)

付表 朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室古墳集成表(1) (亀田, 1981年)

番号	古墳名	墳丘(径・高)(註1)	石室(長・幅・高)	閉塞(註2)	石室構築材(註2)	床面(註3)	棺台数	墳丘内石室数	追葬(遺体数)	副葬品
1	安東 造塔洞古墳	21×10×5 ^m	東槨: 7.20×1.70~1.84×1.70 ^m	A	A	a	6	2	○	鉄製環・鉄製鉸具・鉄鏃・鉄鎌・鉄刀・鉄斧・土器
			西槨: 6.22×1.90~2.36×1.70	A	A	a	5		○	金製耳飾・銅製環・鉄製環・銀製鉸具・鉄製鉸具・鉄刀
2	中佳邱洞古墳	∅20×2.8	5.0×2.0×1.6	A	A	f	3(品字形)	1	○(5)	金銅耳環・鑄造鉄斧・鉄刀・鉄鋌・鉄釘・土器
3	義城 塔里古墳第1墓槨		3.50×1.70×1.80	A	A	d		5	○(2)	金銅冠・金製・銀製垂飾付耳飾・金銅製帶金具・飾玉・鑿形鉄器・鉄鎌・鉄刀子・鉄鋌・鉄釘
4	善山 洛山洞28号墳	∅12.7×4	7.0×1.70×1.67	A	A		石棺4	1	○	土器
5	漆谷 若木古墳	∅21×5~3	5.80×1.35~1.20×1.40	B	B	d(?)		2		鉄鉾・鉄刀・鉄鏃・刀子・輪鏝・雲珠・土器
6	仁同面黄桑洞1号墳	20×23×7~3.5	5.80×1.10×1.80	A・B	A		1	1		金銅製冠飾・金銅製垂飾付耳飾・鉄地銀張帶金具・金銅製飾履・鉄鉾・二又鉾・有棘利器・刀子・鉄斧・土器
7	2号墳	32×27×5.70	5.60×1.0×1.80	A・B	A	d		1		大刀残欠・土器
8	星州 星山洞1号墳	∅13.5×3.6	3.6×1.35×1.56	A	A	d		1		銀製冠飾・金製垂飾付耳飾・金環・銀製帶金具・鉄鉾・鑿形鉄器・三葉環頭大刀・刀子・鉄斧・土器
9	2号墳第1石室	∅27×6	3.42×1.4×1.6	A	A	d		3		鉄鉾・鑿形鉄器・三葉環頭大刀・刀子・鉄斧・方形座金・土器
10	6号墳	∅9×3	3×0.9×1.82	A	A	d		1	(複数)	刀子・鉄釘・鉄鋌・土器
11	月恒面水竹洞古墳									
12	大邱 達西34号墳第1石室	∅10.5	3.9×1.23	A	A	d		3		銀製箭状(鳥形)飾付白樺樹皮製冠帽断片・金製耳飾・銀製帶金具・腰佩金具・金銅製臍当・馬具・武器・土器
13	同37号墳第1石室	∅20×2.12	4.27×1.27×1.56	A・B	B	d		2		金銅冠2・鉄地金張垂飾付耳飾・金銅製耳飾・鈐帶金具・ガラス製首飾2連・有棘利器・鉄鎌・三葉環頭大刀・刀子・鉄斧・馬具・鉄製簪台・鋌・土器
	同 第2石室		3.82×1.42×1.56	A・B	B	d				金銅製前立飾付白樺樹皮帽・金製垂飾付耳飾・金銅製耳飾・金銅製飾履・鉄製鈐帶金具・鉄鏃・鉄鉾・鑿形鉄器・有棘利器8・三葉環頭大刀・三環頭大刀・刀子・鉄斧・鉄鎌・馬具・土器
14	同 第55号墳	∅18×3.9	4.56×1.67×2.0	A・B	B	d		1		金銅冠残欠・金銅製冠帽・金製垂飾付耳飾・瑠璃玉2連・銀製鈐帶金具・銀製腰佩金具・金銅製飾履・鉄鉾・鑿形鉄器・有棘利器・鉄鎌・金銅装三葉環頭二合大刀・金銅透彫鞍橋金具他馬具・鉄製簪台・銀製高坏・青銅製盒・青銅製盞台・土器
15	高霊 主山39号墳									
16	玄風 第1群第1号墳	?×3.0	2×2×1.24	A	A			2		
17	昌寧 松峴洞第1群2号墳		6.39×1.41×1.5以上	A	A			1		
18	同 8号墳	?×3.30~9.7	8.40×1.51×2.08		A			1		銀装鉄鉾
19	校洞 21号墳	∅11.0×2.43	6.51×1.48×1.64	A・B	A	d		1		
20	同 31号墳	∅16.5×3.0	5.55×14.4~1.2×1.9	B	A	c	1	1		金製耳飾・玉類・鉄鉾・刀子・棺金具・鉄釘・土器
21	桂城A地区1号墳	∅15	5.70×1.93×2.50	A	A	d	2	1	○	金製耳飾・金, 銀製釧・銀製帶金具・素環頭大刀・鉄鏃・鋌・土器

付表 朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室古墳集成表(2)

番号	古墳名	墳丘(径・高)(註1)	石室(長・幅・高)	閉塞(註2)	石室構築材(註2)	床面(註3)	棺台数	墳丘内石室数	追葬(遺体数)	副葬品
22	昌寧 桂城A地区2号墳	∅8 m	3.22×1.01×1.30 m	A	A			1		金銅製耳環
23	4号墳	∅8.6	3.56×1.20×1.50	A	A	c	1	1		金銅製耳環・刀子・土器
24	9号墳	∅7	3.55×1.50×1.20	A	A	c	1	1		鉄鎚・刀子・土器
25	同 C地区5号墳		3.25×1.82×0.82以上	(A)	A	a(?)	1	1		金製耳環・鉄鎌・鉄鉾・鉄斧・大刀・刀子・土器
26	9号墳			A	A	a(?)	1	1		鉄製鉸具・紡錘車・鉄鏃・土器
27	14号墳		3.65×1.35×0.99以上	A	A	c	1	1		土器
28	15号墳	∅9.5	3.94×2.25×1.55以上	(A)	A	c	1	1		土器
29	咸安 34号墳	∅40×10	9.67×1.73×1.66	A	A			1		素環頭大刀・圭頭大刀・直弧文鹿角製柄頭小刀・剣身形鉄鉾・鉄鏃・桂甲小札・鉄製眉庇付冑伏鉢・鞍橋覆輪・輪鍔・杏葉・鉄鎚・鉄釘・漆器・土器
30	梁山 夫婦塚	∅54.5×8.24	5.42×2.27×2.57	(A)	A	c	2	1	○(5)	主人 金銅冠・金製垂飾付耳飾・玉類・銀製指輪・銀製鈐帶金具・銀製腰佩金具・金銅製飾履・三葉環頭大刀・円頭大刀 婦人 銀製前立飾付白樹皮製冠帽・金製垂飾付耳飾・金製空玉・金,銀製釧・銀製鈐帶金具・金銀装刀子・玉類 甲 刀子 乙 金銅製垂飾付耳飾・玉首飾・刀子 丙 玉首飾・刀子 その他 馬具・武器・鉄容器・土器
31	慶州 151号墳	∅40	4.34×2	A	A	a	4	2	○	金製耳飾・銀製鈐帶金具・轡・杏葉・鑄造鉄斧・刀子・土器
32	錦山 上佳里古墳		3.26×0.9×1.24	A	A	e				土器
33	大徳 注山里1号墳		2.80×1.20	A	A	b	1			土器
34	7号墳		2.20×0.8~0.9×0.8	A	A	b	1			土器
35	9号墳		2.30×1.10×1.20	A	A	d				土器
36	10号墳		2.20×0.9×1.00	A	A	b	1			土器
37	11号墳		1.60×0.75×0.8	A	A	d				土器
38	12号墳		2.75×0.9×0.9	A	A	b	1			土器
39	論山表井里A区1号墳		3.50×0.9×0.85以上	A	A	c	1			鉄斧・刀子・土器
40	2号墳		2.86×0.95×0.82以上	A	A	c	1			土器
41	3号墳		2.25×0.80×0.85	A	A	c	1			鉄鎌・鉄釘・土器
42	4号墳		2.40×0.68~0.86×0.85以上	A	A	d				土器
43	5号墳		2.50×0.85×0.82以上	A	A	c	1			
44	7号墳		2.65×0.84×1.02	A	A	d				土器
45	8号墳		3.40×1.00×0.95	A	A	c	1			鉄鎌・刀子・鉄斧・鉄釘・土器
46	9号墳		2.20×0.64×0.74	A	A	c	1			鉄鎌・土器
47	10号墳		3.00×0.92×0.78以上	A	A	c	1			土器
48	11号墳		2.70×0.85×0.90以上	A	A	c	1			土器

註 (1)∅は直径を示し、a×b×cのa、bは墳形が楕円形等の場合の長径、短径を示す。
(2)Aは塊石・割石などを使用するもの。Bは板石、大石を使用するもの。A・Bは両者を使用するもの。
(3)この分類は本文128ページによる。